

## 会員の出した本

高橋明善・蓮見音彦・山本英治編

『農村社会の変貌と農民意識』

(東京大学出版会、一九九二年、九四七六円)

故福武直会員が主宰して一九五三年に実施された秋田県農村と岡

山県農村の比較調査はつとに有名である。日本農村を「東北型農村」と「西南型農村」に類型分けし、それぞれに固有の社会構造類型が照応するという仮説が、それをもとに導かれたからである。その後、一九六八年、それらの農村について第二次の追跡調査が行われる。そしてさらに、一九八五年、第三次の追跡調査が行われた。本書は、その第三次追跡調査の報告である。今回は一次調査から一五年後と三二年後の農村の変化が見れることになる。

本書の分析で興味深いのは、六八年から八五年の一七七年間にほとんど農民意識の変化が進んでいないことである。この後半一七年は、前半一五年に比べると農村社会の変化は大きかった。全般的な農業の衰退や家族形態の変化、それにとまなう旧部落秩序の解体などがそれである。にもかかわらず、意識面については、前半一五年の変化は大きかったが、後半一七年はほとんど変化がないか、あるいはむしろ前半の変化を逆戻りする傾向さえ見られる、という。たとえば単独相続を支持するものは、六八年でやや減少したものの、八五年には再び五三年当時と同じ割合に戻ったと指摘する。

三〇年以上離れた時点を比しようとするとき、調査項目の連続性を保つことがかむずかしくなる。意識調査にあつてはとくにそうである。著者たちはそこをあえて動かさず、連続性を確保しながら右のような貴重な結果をえた。しかし、著者たちは農家の階層と意識との関連が不透明になったことも、今回の分析結果として指摘している。農民意識をつかむにしても、もはや階層という三〇年来の枠ぐみではない現代農村の状況にそくした枠ぐみが必要なのであろう。もちろんそれは、本書に求めるべきものではなく、本書を通じて私たちが考えるべき問題である。

(秋津 元輝)